

研究課題	青年の自己確立 — 日本的アイデンティティの理論的構築 —
研究代表者	柴田 康 順 (人間学研究科後期課程福祉・臨床心理学専攻)

① 研究の目的

Erikson (1959) が提唱したアイデンティティ理論を、そのままの形で現代の日本人青年の自己確立の問題に援用することは、日本人の心性を理解する上で適切ではないと考えられる。青年が抱える問題を多面的に捉えることで、より適した自己確立理論を構築することが必要とされている。日本人の心性がより適切に反映された自己確立理論を構築することで、現代の日本人青年についての理解が可能となると考えられる。結果として、現代の青年が直面している職業選択などの問題をはじめ、様々な臨床的な問題を理解するための理論的枠組となることが期待される。

本研究により、日本の青年に適合する自己確立の理論的枠組みの基礎を構築することを目的とする。本研究で目的とする自己確立理論は、Allport (1937) のパーソナリティ階層的組織の図式のように、個人の自己の個性性を統合する試みであり、このような研究は大倉 (2002) のほかにはほとんど見られない。また、白井 (2010) は近年の青年心理学におけるアイデンティティ研究を鑑み、個性性を重視したナラティブモデルと類型論としてのステイタスモデルを統合する必要性について述べている。そこで本研究では、青年の①父子関係、②母子関係、③きょうだい関係、④同性の友人関係、⑤異性の友人関係、⑥時間的展望や自己実現という、対象関係や自己感・他者感などを含めた6つの側面から多面的に把握する。さらに、これらの6つの側面について焦点を当てつつ、研究協力者自身が抱える個人的な問題について調査する。具体的には、就職や結婚など人生における転機を最近経験した10名の青年に対し、継続的な調査を行う。

アイデンティティの状態は、面接法や質問紙法を用いて測定されることが多い。無藤 (1979) は Marcia (1966) の考案したアイデンティティ・ステイタス面接を日本人に適した形に修正した。しかし、青年期のアイデンティティは乳児期から現時点までのすべての発達課題の統合であると考えられるため、アイデン

ティティ・ステイタス面接ではアイデンティティを把握するには不十分ではないかと考えられる。

また宗田・岡本 (2006) はアイデンティティを「個」と「関係性」の面から捉え直し、質問紙作成を試みている。「個」としてのアイデンティティは従来の質問紙で測定できるように思われる一方で、「関係性」としてのアイデンティティは日本的な「場」の意識を反映させたような側面であることが興味深い。質問紙法による調査は妥当性と信頼性ともに十分に兼ね備えているとは言えない状態である。

以上の点から、アイデンティティという概念を面接法や質問紙法などを用いた調査研究によって探索的に捉えようとするのは困難であると考えられる。そのため、従来の研究では理論をそのまま援用して、別の概念との関連を調べるという仮説検証型のものが多く行われてきた。しかし、日本的なアイデンティティとは、西洋的な自己を反映した「個」としてのアイデンティティより、日本的な「場」の意識を反映した「関係性」としてのアイデンティティに、より重点を置いたものであると考えられるため、Erikson の理論をそのまま援用した測定方法を用いることは適していないと思われる。ところで、Franz & White (1985) は幼児前期の関係性の課題である対象および自己の恒常性を査定するために TAT は有用であると述べている。また、TAT 以外にも個人のパーソナリティを測定するために投映法を用いることで、面接法や質問紙法では把握することが困難な個人の無意識的な部分にも迫ることが可能となると思われる。これまでに質問紙法、面接法、投映法を併用して、アイデンティティに関して総合的に調査した研究はほとんど見られない。そこで、本研究ではこれらの測定法を併用した縦断研究を行い、青年の自己確立の様相と経緯を把握していく。

② 研究の経過

2010年10月に①父子関係、②母子関係についての調査を行った。2011年2月～5月に③きょうだい

関係についての調査を行い、併せて家族関係全体についての面接を実施した。2011年6月～7月に④同性の友人関係と併せて親友との関係についての調査を実施した。2011年11月～2012年2月に⑤異性の友人関係およびこれまでの恋愛についての調査を行った。調査はすべて半構造化面接から実施し、質問紙、投映法の順に施行した後、1時間程度の非構造の面接を行っている。所要時間は凡そ4～5時間程度であった。

③研究の成果

①父子関係、②母子関係

父親、母親ともに受けている影響は異なり、どちらも価値観、嗜好、思考形式に関するものが多いが、父親からの影響はより社会性に色づけられた要素が多く、母親からはより個別性の高い要素について、より強い影響を受けていた。両親の関係から受ける影響は、基本的な対人関係に必要な能力（関係形成から維持、対立からの回復など）についてのものがほとんどであった。TATは主に調査協力者の対象関係を推測するために用いたが、現状の悩みが主な反応として表れ、両親イメージは希薄なものが多かった。ただし、特に親との密着が強く、主体的に自立できていない物語を生成した人は、対人的対立場面を認識せず、物語性に乏しい反応が多く生成する傾向があった。

③きょうだい関係

出生順序だけではなく、きょうだいの人数、きょうだいとの年齢差などの要因が強く影響し、それによってきょうだいとの距離感は大きく異なっていた。特に、「比較」「競争」という要因は年齢が近く、同室で生活していた人ほど強く見られ、負の感情の処理については解決すべき課題として認識されていた。同時に『自分は自分』という意識も生まれてくる関係であり、きょうだいのことを認めることは、それと付随して起こる感情であった。きょうだいが年長者である場合、目標、ライバルとして最も身近なモデルとなり、進路選択、興味、価値観などに強い影響を受けるが、年少者の場合影響は曖昧なものとなり、『自分の影響を受けている』という意識が強い一方で、自分と同様の選択を行うことを嫌う人が多かった。ただし、これらは「年齢が近く、同性である場合」という条件があるようで、年齢が離れている場合や異性の場合、「自分とは違う存在」と初めから考えるため、同一視を望むことはないのではないかと思われた。

④同性の友人関係

友人として認識される関係の近さは研究協力者ごとに異なり、「知り合い(クラスメート・同僚)」「友人」「親友」の順に個別性が増していた。関係性が分化している程度に応じてアイデンティティは確立されているように感じられた。中でも『衝突を避け、表面的に他人に合わせる関係』を構築してきた人は、友人関係を重視しておらず、持続的な人間関係を持つことが非常に困難であった。このような人は他者からの影響を認知しておらず、集団の中で自己を規定させることが困難であるため、集団への所属感を持つことができず、『第三者的な関わり方』を取っているようだった。

⑤異性の友人関係

異性の友人関係は性別によって異なる変遷をしていた。男性の場合、異性の友人との関係は小学校低学年の頃までは同性と区別されることはなかったが、二次性徴と前後して関係の持ち方が『分からなくなり怖かった』と語る人が多かった。女性の場合それまでの関係が変わったという認識はしていても、男性に対する意識が大きく転換するという事はないようだった。大学以降は再び異性という意識が低減しているが、これは一個人として異性の友人と関わることができるようになったことに起因していた。また、異性の友人関係を持続するために、恋愛にならないように注意するという事であり、恋愛と異性の友人関係の関連についても語られた。

④研究の課題と発展

本研究は一度限りの調査では得られない個別性の強いデータを収集するために、研究協力者それぞれに対して5度の調査を予定している。しかし、4度の調査を行った結果、複数回会うということ自体が研究協力者の語りに影響を与えている可能性について考慮する必要性が出てきた。筆者と研究協力者の関係性が継続的にどのように変化し、得られたデータにどのような影響を与えているか考察することで、より厚みを持った理論構築が可能になると考えられる。